

# 河東節のアクセント

——『小袖模様』を例に——

A Study of Accents Reflected in the Katōbushi “Kosode-moyo”

坂 本 清 恵

SAKAMOTO Kiyoe

はじめに

江戸浄瑠璃である河東節『十寸見要集』所収の「小袖模様の段」には、上方アクセントを反映する胡麻章がみられる。近世音曲については、これまで金田一春彦『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房（一九七四年）二九四頁で、次のように上方アクセントを聴くことがありと報告されている。

常磐津はおもしろい楽曲で、原則として、東京アクセントのメロディーでいきながら、東京で○●型、京都・大阪で●○型の二拍名詞に限って●○調のメロディーをつけて、上方起源の音楽であることを示している。清元は常磐津に似ているが、吉川英史によると、「月」「雪」「花」の三語に限り、ツキ(●○)、ユキ(●○)、ハナ(●○) という上方式のメロディーをもっているという調子である。「色」もこれに準ずる詞らしい。

また、金田一は、長唄について、東京アクセントを基準とし、語

句のアクセントを尊重するあまり、語句のアクセントが変わると旋律が変化するとし、アクセントが尊重されるようになったのは明治の頃、吉住小三郎からであったとする。

筆者も謡を振りこんだ長唄についての研究を行い、長唄にも上方アクセントを反映する曲節があること、明治期に、唄については上方アクセントから東京アクセントに変更された場合にも、三味線の旋律には上方アクセントの反映がみられることと、三拍動詞は語類を超えて、HLLが上方アクセントと考えられていた可能性を示した。<sup>(2)</sup>江戸音曲と考えられてきた長唄であっても、曲の成り立ちから上方アクセントの旋律で唄われていたということは、近世の音曲においては、上方アクセントが一定の影響を持っていたことになる。

河東節『小袖模様』の詞章は、古浄瑠璃の詞章を振り込んだが、確認できた同じ詞章を持つ最も古い作品に、伊藤出羽掾の正本「第三 みちゆき付りこそでうりの事」『和国びじん哥謡并こそでうり』がある。ここでは『こそでうり』という節事であった。古浄瑠璃の

『いそでうり』から『小袖模様』にタイトルの変更がなされるのだが、寛文年間に、流行のファッションカタログとも言える「小袖模様雛形」が刊行され始めたころから、さまざまな太夫が自身の節付けで語り、唄った流行の歌詞であった。上方でも江戸でも親しまれた詞章は、わずかではあるものの、享受地による地域的な差があり、かつ半太夫と初世河東の両者が独自に詞章を改めた部分も確認ができる。河東節『小袖模様』の詞章については、同時期に江戸で活躍した土佐少掾の正本に最も近い<sup>3)</sup>。

正本により胡麻章の多寡には違いがあるが、河東節、嘉太夫節、土佐節の正本に多くの胡麻章が確認できる。胡麻章の反映するアクセントの違いはどのような状況であるのだろうか。河東節の胡麻章を中心に、近世の江戸音曲に反映するアクセントの一例として考察をおこなう。

#### 一 河東節『小袖模様』の胡麻章

『小袖模様』は江戸半太夫が語り、河東節に入ったが、半太夫と初世河東が関わった正本『鳩鳥』には胡麻章がない。胡麻章については、以下の①から⑤を比較検討する。初世河東の節付けによる直の版元である①小松屋板『小袖模様』を中心に、四世河東により六行本に改めて編纂された②『十寸見要集』、明治三十六年に山彦秀治郎の演奏を五線譜に採譜した③『世界音楽全集』との比較を行う。また、古浄瑠璃のうち胡麻章の多い、嘉太夫節、宇治加賀掾の④『紫竹集』と、江戸の土佐節、土佐少掾橘正勝の⑤『蘭曲後撰集』とも比べてみる。資料の略称は「」で示す。

①「小袖もやふの段」小松屋板 国立国会図書館蔵 (229.227) 享保

二(一七二七)年〜九(一七二四)年「小松屋」九行二丁  
(参考) 小松屋板 東京国立博物館蔵 (229.227)・小松屋板 抱谷文庫本 国文学研究資料館紙焼きにて確認(ホ31-51)

「小袖もやふの段」井筒屋板 国立音楽大学竹内文庫蔵 (02-2001-008 ~ 010) [井筒屋]

「小袖もやふの段」いがや板 国立音楽大学竹内文庫蔵  
「小袖もやふの段」糸竹哥みどり 国立国会図書館蔵(寄持551.1)

大坂心齋橋筋瓦町 出版元破れ 十二行横本 式亭三馬旧蔵本

②「小袖模様の段」『十寸見要集』初板 宝暦九(一七五九)年以降  
国立音楽大学竹内文庫蔵 (02-1007) [十寸見]

武江浅草御地内伊勢屋吉十郎板 六行三丁

③「半太夫節小袖模様」『世界音楽全集』第十八巻 春秋社 昭和六年 [世界]

田中正平博士邦楽研究室にて明治三十六年採譜 山彦秀治郎演奏  
五線譜 上段が唄、下段が三味線を採譜したもの。

④「いそでうり」『紫竹集追加 九』天理図書館蔵 (911.7 ~ 177)

「加賀掾」二條通寺町西へ入町 山本九兵衛刊 八行二丁

⑤「染小袖もやうの段」『蘭曲後撰集 二』  
【六十五】小そでもやうのだん 九行二丁

都立中央図書館蔵『蘭曲大竹集 二』加賀文庫 (535.5) 後題箋  
(参考)「染小袖もやうの段」大阪府立図書館『蘭曲集3』(甲和604) 大傳馬町三丁目 鱗形屋三左衛門板

半太夫節正本として大坂で板行された『糸竹哥みどり』掲載の当

該曲には、詞章には上方板の特徴がみられるが、胡麻章はごくわずかで、どここのアクセントを反映したかをみることはできない。

①「小松屋」は、薄物正本で、初世江戸太夫河東が、小松屋と独占契約を結んで出版したものとみられる。初世河東は、貞享元年（一六八四）の江戸生まれで、江戸品川町の魚商天満屋藤左衛門の子で、江戸半太夫の弟子である。<sup>(4)</sup>②「十寸見」は、四世河東が新たに六行本の節事の正本を編纂したものである。四世河東は、宝暦十一（一七六一）年、市村座で『助六所縁江戸桜』を語り、河東節の代表曲となつて今日まで伝えられている。いずれにしても江戸生れの太夫の正本である。③「世界」の演奏者は、山彦秀治郎である。弾き語りをしたということになろう。山彦秀治郎（一八四一―一九一九）の父は九世十寸見河東、明治二十年に秀翁を襲名、死後に十一世十寸見河東を追贈されている。④「加賀掾」とした宇治加賀掾（一六三五―一七二一）は、和歌山から京都へ上り、四条河原で興行を始め、近松門左衛門の作品も多く語っている。⑤「土佐少掾」とした土佐少掾橘正勝は、人形浄瑠璃薩摩浄雲座の人形遣い内匠市之丞の子。寛文初年より浄雲の下で内匠虎之助と称して活躍しはじめ、寛文十一（一六七二）年には独立して土佐座を興した。<sup>(5)</sup>

①「小松屋」、②「十寸見」については、〈コトバ（詞）〉〈イロコトバ（色詞）〉〈地コトバ〉〈イロ地〉には胡麻章はないが、〈色〉には胡麻章がある。また他音曲を取り入れた〈ヒゼン〉〈ウタイ〉にも胡麻章はなく、河東節の曲節〈サイツメ〉などにも胡麻章がない。義太夫節の胡麻施譜方法とは異なるところである。

用例のうち、①②に胡麻章のないもの、詞章が異なるもの、地名は省略した。また、装飾的な胡麻についてもアクセントの反映を推

定しにくいので取り扱わない。

胡麻章については、上げ胡麻をU、平胡麻をS、下げ胡麻をD、その他を\*、胡麻なしを×とする。音階については、アラビア数字に直し、一オクターブ高い音には・を、低い音には―を付した。

## 二 名詞のアクセント

### 【二拍名詞】

これまで、金田一をはじめ江戸音曲における上方アクセントの反映の指摘は二拍名詞によってきた。上方アクセントと江戸アクセントの高低が顕著であるためであらう。ここでもまず二拍名詞を掲出順に確認しておく。

#### 1 「いまをさかりと」



「小松屋」

#### ②



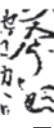
「十寸見」

#### ④



「加賀掾」

#### ⑤



「土佐少掾」



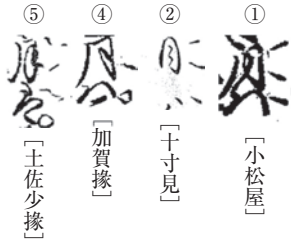
「井筒屋」



③ 「世界」

「いまを〈DSD〉」①「小松屋」②「十寸見」、「今を〈×U×〉」④「加賀掾」はLHLを反映する胡麻章が、③「世界」も〈237〉でLHLを反映する。「今」は第四類で「今を」であればLHHであるが、『平家正節』にも助詞が低く付く例もあり、近世京都アクセントが歌詞に反映する例として許容できる。⑤「土佐少掾」の胡麻章は不明である。参考に挙げた「井筒屋」は「いまを〈DD×〉」で低起式無核の遅上りのLHLを反映するか。

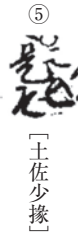
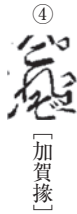
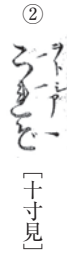
## 2 「さやけき月は」



③ 「世界」

「月は〈UDD〉」①「小松屋」②「十寸見」、「月は〈×D×〉」④「加賀掾」はHLLを反映する胡麻章である。③「世界」も〈644〉でHLLを反映する。⑤「土佐少掾」は「月は〈DUD〉」でLHLである。「月」は第三類で、近世京都アクセントはHLLで①②③④はこれを、「土佐少掾」のみ江戸アクセントを反映する。

## 3 「いれぞいの。」



③ 「世界」

「これ」は第一類で、近世京都アクセントはHH、①「小松屋」、「十寸見」は〈ラトシ〉とあるが、「これぞ」に〈UUD〉がふられHHを反映、⑤「土佐少掾」も装飾はあるが、同様であろう。③「世界」は〈673〉で一拍目が低く、江戸・東京アクセントであろう。④「加賀掾」は区切りの直後で、低く始まるのであろうが、近世京都のアクセントを反映とはしにくい。

## 4 「うすむらさきの藤の花」



③ 「世界」

⑤  「土佐少掾」

「藤の花〈UUUU〉」①「小松屋」・②「十寸見」は最初のUよりも「の」上げ胡麻に〈ア〉として〈アタリ〉が付いていることもあり、LLHHHの少し遅上りの平らなアクセントを反映しているようである。「藤」は第一類、「花」は第三類、助詞「の」があるので、近世京都アクセントであればHHHHLとなるが、ここは江戸のアクセントを反映するか。③「世界」が〈67#426〉で「花」のみHLの京都アクセントであり、三味線も同様である。⑤「土佐少掾」は装飾胡麻である。

5 「色をあらそふ花つくし」

①  「小松屋」

②  「十寸見」

⑤  「土佐少掾」



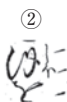
③ 「世界」

「色を〈UD\*〉」①「小松屋」は、第三類京都アクセントHLを反映、〈レイセイガ、リ〉とある「いろを〈UD\*〉」⑤「土佐少掾」も同様である。③「世界」は〈677〉だが助詞「を」の前が高い

ので、LHLで江戸・東京アクセントであろう。

6 「しほをくむていか」

①  「小松屋」

②  「十寸見」

④  「加賀掾」


⑤  「土佐少掾」



③ 「世界」

「汐」は第三類で、近世京都アクセントはHL、江戸アクセントはLH(L)である。「しほを〈Uxx〉」④「加賀掾」、「しほを〈UDS〉」⑤「土佐少掾」でいずれもHLLで近世京都アクセントを反映する。しかし、①「小松屋」②「十寸見」は「しほを〈UUU〉」でいずれのアクセントの反映ともできない。③「世界」は〈67#4〉で江戸・東京アクセントを反映する。

7 「まつた柳に雪ふりて」

①  「小松屋」

② 「十寸見」

⑤ 「土佐少掾」



③ 「世界」

「雪」は第二類で、近世京都アクセントはH L、江戸はL H（L）である。⑤「土佐少掾」のみ「雪（UD）」で近世京都アクセントに合致、①「小松屋」、②「十寸見」は「雪（DD）」とともに低く平らでいずれのアクセントを反映するとも言えず、③「世界」は（67）で、江戸・東京アクセントを反映する。

8 「つもれるかげにしらさぎの」

① 「小松屋」

② 「十寸見」

⑤ 「土佐少掾」



③ 「世界」

「陰」は第五類で、「かげに（SUU）」①「小松屋」でL H Hになるが、「かげに（DUS）」⑤「土佐少掾」はL H Lで近世京都アクセントを反映する。「かげに（UUU）」②「十寸見」は高平らな胡麻章でこのアクセントとも言えず、③「世界」は強いていえば（3327）で江戸・東京アクセントを反映する。

9 「かたには雲に龍をそめ」

① 「小松屋」

② 「十寸見」

⑤ 「土佐少掾」



③ 「世界」

「雲」は第三類で、現代東京アクセントが例外であるが、近世江戸はL H（L）が推定され、近世京都はH Lである。「雲に（SDS）」①「小松屋」、「雲に（UD\*）」②「十寸見」は一拍目がゆるやかではあるがUとし、③「世界」も（6#4#4、）雲に（UD×）⑤「土佐少掾」は「に」の上部の下げ胡麻を「雲」の二拍目と考え、いずれもH Lを反映しているとみられる。近世京都アクセントの反映としてよい。

10 「すそにはとらのうそぶきて」


① 「小松屋」

② 「十寸見」

④ 「加賀掾」



③ 「世界」

⑤  「土佐少掾」

「裾」「虎」とも第一類名詞で、近世京都アクセントでは「裾には虎の」はHHHHHHHである。①「小松屋」は近世京都アクセントを反映しているとみてよいだろう。②「十寸見」は助詞「は・の」に胡麻章はないが、①同様に近世京都アクセントを反映している。③「世界」は〈#4666667〉で「裾」の語頭が低く、江戸アクセントをうかがわせるが、あとは平らである。④「加賀掾」は「すそには〈DD×U〉」で「裾」は平らであるが、近世京都アクセントを反映しているとは言えない。⑤「土佐少掾」は「とらの〈UU〉」が近世京都アクセントの反映である。

# 11 「松の。其下に」

①  「小松屋」

②  「十寸見」

⑤  「土佐少掾」



③ 「世界」


④には胡麻章がない。

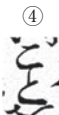
「した」は第二類であるが、現代京都・東京が例外である。「下に〈U入DD〉」①「小松屋」・②「十寸見」はHLで、近世京都アクセントとして節付けたと考えられる。「した」は『平家正節』に

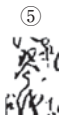
HHがあり、これを「下に〈UUU〉」⑤「土佐少掾」が反映している。③「世界」は〈332〉で近世京都アクセントの反映とできるか。

# 12 「琴をいろよく染なして」

①  「小松屋」

②  「十寸見」

④  「加賀掾」

⑤  「土佐少掾」



③ 「世界」

「琴」は第五類で近世京都アクセントはLFで、「ことを〈××U〉」④「加賀掾」と③「世界」の〈23〉がこれを反映する。「琴を〈SDD〉」①「小松屋」、「ことを〈SDDU〉」②「十寸見」は、江戸アクセントを反映、「琴を〈UUU〉」⑤「土佐少掾」はどちらともつかない。

# 13 「れんぼのやみに」

①  「小松屋」

②  「十寸見」





「加賀掾」



「土佐少掾」



③ 「世界」

「闇」は、第三類で近世京都アクセントはHLであり、「やみに〈USS〉」①「小松屋」、「闇に〈UD×〉」②「十寸見」、「やみに〈U\*×〉」④「加賀掾」、⑤「やみに〈\*D\*〉」。「土佐少掾」はいずれもこれを反映している。③「世界」は〈3#4#4.3〉で外れるが、三味線譜が〈5#43〉で京都アクセントを反映している。

14 「系もんながしの鞠のには」



「小松屋」



「十寸見」



「土佐少掾」

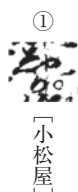


③ 「世界」

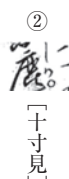
「鞠」は第三類、「庭」は第一類である。近世京都アクセントでは、「鞠の庭」はHLHHである。①「小松屋」は〈UDDUS〉で「庭」が合わない。「鞠の〈UDD〉」②「十寸見」は、近世京都アクセントに合致する。③「世界」は〈3#4#4.3〉で「鞠」は江戸・東京アクセントである。⑤「土佐少掾」は〈DDUUU〉で

低く始まる江戸アクセントであったか。

15 「もみちにしか」



「小松屋」



「十寸見」



「加賀掾」



「土佐少掾」



③ 「世界」

第三類「鹿」は、LHの江戸・東京アクセントを反映するのが①「小松屋」〈SU〉と③「世界」〈#4#4.〉で、HLの近世京都アクセントを反映するのが②「十寸見」〈US〉、④「加賀掾」〈×D〉である。⑤「土佐少掾」は〈UU〉でどちらとも言えないが、一拍めが低くないので、上方アクセントの反映か。

二拍名詞について、上方アクセントに合致するものを○、やや反映とみてよいものを△、江戸アクセントに合致するものを●、やや反映とみてよいものを▲、いずれかのアクセントの反映とはできないものを×として表に示した。

金田一という常磐津で上方アクセントが反映する「月・花・雪」



がすべて出現するが、「月」のみ⑤「土佐少掾」を除き、上方アクセントである。上方で活躍した宇治加賀掾の正本である④「加賀掾」が上方アクセントを反映することは当然であるが、江戸浄瑠璃である①「小松屋」、②「十寸見」の江戸での正本に上方アクセントの反映がみられる。特に②「十寸見」は上方アクセントの反映が強い。これに比して、明治期の河東節を採譜した③「世界」は、「花・月」は上方アクセントであるが、多くは江戸・東京アクセントである。ここからは、河東節において、徐々に上方アクセントの影響がなくなつたとみることができよう。また、「闇」で指摘したように三味線に上方アクセントを反映した旋律が確認できる。唄は江戸・東京アクセントの影響を受けて変化しても、三味線の旋律には作曲当時のアクセントが残つたとみられる。

また、江戸で活躍した⑤の土佐少掾の正本にも「雪・色・汐・雲・闇」がH Lの上方アクセントを反映している。二拍名詞で、上方と江戸アクセントでは高低が逆転する第二類・第三類に、上方アクセントが現れることは、江戸浄瑠璃が上方アクセントに倣って節付けされたと言える。

	第一類	第二類	第三類	第四類	第五類
①	是○藤●庭×裾○虎○	雪×下○	月○花△色○汐×雲○闇○鞠○鹿●	今△	陰△琴●
②	是○藤●庭×裾○虎○	雪×下○	月○花△色×汐×雲○闇○鞠○鹿○	今△	陰×琴●
③	是●藤●庭×裾●虎○	雪●下△	月○花○色●汐●雲○闇▲鞠●鹿●	今△	陰●琴○
④	是× 裾×		月○ 汐○ 闇○ 鹿○	今△	琴○
⑤	是○藤●庭●裾△虎○	雪○下△	月● 色○汐○雲○闇○鞠▲鹿△		陰○琴×

## 「二拍以外の名詞」

16 「すそのは田子のうらなれや」

⑤

「土佐少掾」

②

「十寸見」

①

「小松屋」



③ 「世界」

「裾野」は二拍第一類「裾」に一拍第三類「野」からなる構成で、近世京都アクセントはH H H H H Lが推定される。「すそのは」(SSS)①「小松屋」、「すそのは」(UUUU)②「十寸見」はH H Hを反映する。③「世界」(2337)は、語頭が低く、江戸アクセントの反映である。⑤「土佐少掾」は(UUU\*)でどちらのアクセントとも言えない。

17 「まつた柳に雪ふりて」

① 「小松屋」

② 「十寸見」

⑤ 「土佐少掾」



③ 「世界」

「柳」は三拍第一類で京都アクセントはHHHであるが、近世京都アクセントにはHHLもみられる。「柳」に〈UU\*D〉⑤「土佐少掾」がHHLを反映するが、「柳」に〈DSSS〉①「小松屋」、「柳」に〈DSSS〉②「十寸見」は語頭が低く始まる江戸・東京アクセントを反映する。③「世界」は〈6677〉でこれも江戸・東京

18 「つもれるかげにしらさぎの」

① 「小松屋」

② 「十寸見」



③ 「世界」

④ 「加賀掾」

⑤ 「土佐少掾」

「白鷺」は第二類形容詞語幹に二拍名詞第一類の語構成で、アクセント体系変化前であれば、「白鷹・白布」などLLLLであり、変化後にHHHLとなり、現代京都HHLLである。

「しらさぎの〈UUUU〉」①「小松屋」・②「十寸見」はHHHLからHHHHになったと思わせる施譜で、近世京都アクセントの反映とみてよいだろう。「しらさぎの〈U\*U\*U〉」④「加賀掾」と「しらさぎの〈UUU\*×D〉」⑤「土佐少掾」はHHHLでいずれも近世京都アクセントの反映である。③「世界」〈23333〉は、江戸・東京アクセントの平板型を反映する。

19 「引ききくらふけしきはさも」

① 「小松屋」

② 「十寸見」



③ 「世界」

④ 「加賀掾」、⑤ 「土佐少掾」には胡麻章がない。

「気色」は、近世京都アクセントHHHLとHHLLの両様で、現代京都はHHLLである。①「小松屋」の一拍目の胡麻は上げ胡麻ではないが、長く上に撥ねがあり、HHLLを反映するとみられる。②「十

寸見」は〈U D U D〉でやはりH L Lである。③「世界」の〈6 6 7 # 4〉はどちらのアクセントの反映とも言えない。

## 20 「梅にうぐぬす」

① 「小松屋」

② 「十寸見」



③ 「世界」

④ 「加賀掾」、⑤ 「土佐少掾」には胡麻章がない。

「鶯」は近世京都アクセントH L L L, 東京アクセントはL H L Lである。「うぐぬす」〈U S D D〉①「小松屋」・「鶯」〈U S D D〉②「十寸見」はともに近世京都アクセントH L L Lを反映する。③「世界」は〈# 4 # 4 6 # 4 # 4〉で二拍めの「ぐ」の後半が上がる江戸・東京アクセントL H L Lを反映する。

## 三 動詞のアクセント

### 【二拍・三拍動詞】

ここでは、出現形が二拍、三拍の動詞を主に扱う。  
長唄のように、三拍動詞第二類の近世上方アクセントであるH L Lを反映する胡麻章が、河東節正本にもみられるのであろうか。

21 a 「いまをさかりとみゆるもあり」 b 「さもありくと見ゆるも有り」

① a 「小松屋」

b 「小松屋」

② a 「十寸見」

b 「十寸見」

④ a 「加賀掾」

b 「加賀掾」

⑤ a 「土佐少掾」

b 「土佐少掾」



③ 「世界」 a



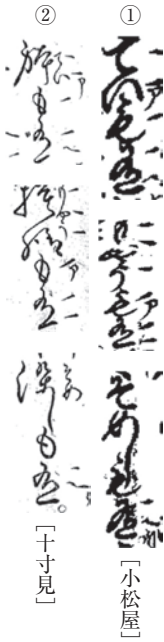
③ 「世界」 b

a は出だしの部分で、b は中盤の部分である。河東節の①「小松屋」、②「十寸見」は「見ゆる」 a が〈\* U U〉でL H H, b が〈U D \*〉H L L Lを反映する。b のH L L Lは近世上方の第二類一段動詞の終止連体形の反映とみられるが、a のL H Hは幕末頃に起こる京

都アクセントの動詞の再編成に伴う、一段動詞第二類が第三類と合流したのちの変化形としてとらえてよいのかどうか、判断に迷うところで保留とする。③「世界」aは〈563〉で起伏式の東京アクセントであるが、bは〈443〉で近世京都アクセントとみてよい。④「加賀掾」はa〈ウ×U〉、b〈×D×〉で高起式を反映し、bはHLLである。⑤「土佐少掾」は、a bともに語頭に下げ胡麻があり、江戸・東京の第二類起伏式アクセントなのか、①「小松屋」②「十寸見」aと同様に京都の新しい低起式を反映したものかどうかは、これも判断を保留したい。

「見ゆる」については、a bでの相違がみられたが、続く二拍動詞の「有り」については、①「小松屋」、②「十寸見」ともに〈UD〉である。HLを反映するが、二拍動詞「有り」は第二類動詞で、これは江戸アクセントである。

なお、この曲には「もあり」という文末表現が多数使われており、次のように①「小松屋」、②「十寸見」では江戸アクセントでの終わり方である。



こちらの「有り」の例もすべて高く始まり、近世京都アクセントとは言えない。

22 「みが、れいづる。そのはらや」

①

「小松屋」

②

「十寸見」

④

「加賀掾」

⑤

「土佐少掾」

③「世界」

第一類動詞「みがく」に助動詞「る」がつき、第二類動詞「出る」が続く例である。近世京都アクセントであれば、HHHLHLとなる。①「小松屋」と②「十寸見」はほぼ同じ胡麻章で「みがかれ」〈UUU\*〉では京都アクセントを反映、「出る」〈\*U〉は「い」に上げ胡麻があり、「る」にも上げ胡麻はあるが、これはHLLの近世京都アクセントを反映するとみてよいだろう。③は〈4167443〉で「磨かれ」は低く始まることから、江戸・東京アクセント的である。④「加賀掾」は〈ウ××××D〉で高起式であるところは、近世京都アクセントの反映とみてよい。⑤「土佐少掾」は装飾的胡麻が多くアクセントは関係なく唄われたか。

23 「花はむかしをわすれずして。」

- ① 「小松屋」  
② 「十寸見」  
③ 「土佐少掾」  
④ 胡麻章なし。



③ 「世界」

この部分、①「小松屋」と②「十寸見」は同じ施譜で、「わすれずして」に下げ胡麻（DDDDDD）が施されている。近世京都アクセントであれば、HHHLHHとなろう。「忘る」が第一類動詞であるため、低く平らであれば、京都アクセントの反映の可能性もある。

⑤「土佐少掾」には細かく胡麻章が付され、「わすれずし（UUU）」はむしろ、第二類動詞のアクセントを模した唄い方をしたということであろうか。③「世界」の（67733）は江戸・東京アクセントであろうか。

24 「きつれてしほをくむていか」

- ① 「小松屋」  
② 「十寸見」



③ 「世界」

- ⑤ 「土佐少掾」

「汲む」第一類動詞で、①「小松屋」、②「十寸見」、⑤「土佐少掾」はいずれも「くむ（UU）」でHHの京都アクセントを反映している。③「世界」のみ（67）であり、江戸・東京アクセントである。④「加賀掾」には胡麻章がない。

25 「しうわりと。つもれるかげに」

- ① 「小松屋」  
② 「十寸見」  
③ 「加賀掾」  
④ 「土佐少掾」



③ 「世界」

「積れる」は第一類動詞に完了の助動詞「り」が接続した形で、近世京都アクセントではHHHLとなるところである。「つもる」は、現代東京アクセントは平板型から起伏型に変わっている。ここでは③「世界」が（2444）で江戸アクセントを反映している。①「小松屋」の（SDDU）はHHLLを反映しているのか、あるいは②「十寸見」の（DDUD）と同じ高低のLLHLを反映して

いる可能性もある。L H H L からの遅上りの江戸アクセントであろうか。④「加賀掾」(××U\*)を合わせてみると、近世京都において、第三類への合流の兆しがあったのであろうか。⑤「土佐少掾」は(U S U S)か高さがはつきりしないが、①と同様であろう。

26 「つくりと。とまりたるていも有」

① 「小松屋」

② 「十寸見」

④ 「加賀掾」

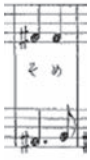


③ 「世界」

「とまる」は第一類と思われる、近世京都アクセントは「とまりたる」HHHLLであろう。①「小松屋」は(SDDUS)でどちらのアクセントとも言にくい。②「十寸見」は、(UUUUU)は「たり」まで高いが、京都アクセントを反映している。③「世界」は(677#4#4)で東京アクセントを反映、④「加賀掾」は(××DD)で、近世京都アクセントの反映である。

27 a 「龍をぞめ。」 b 「いろいろく染なして」

① a 「小松屋」



a

「迷ふ」は第二類動詞で、近世京都アクセントでは、HLLである。

② a 「十寸見」

⑤ a 「土佐少掾」



③ 「世界」 b

「染む」は第一類動詞である。①「小松屋」と②「十寸見」のaは(SU)×、③「世界」aの三味線が(×#45)×、bの唄譜が(×23)×でいずれも江戸アクセントLHを反映している。①「小松屋」と②「十寸見」のbは(U)D×が振られ、京都アクセント連用形のHLを反映する。⑤「土佐少掾」はa bともに(U)U×で京都アクセントを反映しているとみる。

28 「れんぼのやみにまよふ 柏木の」

① 「小松屋」

② 「十寸見」

⑤ 「土佐少掾」



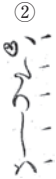
③ 「世界」

「まよふ」に〈SSD〉①「小松屋」、〈USD〉②「十寸見」、〈USD〉⑤「土佐少掾」でHLLを反映している。③の「世界」は、唄が〈#4 #4 3 1〉、三味線譜〈#4 3 1〉も含めてHLLを反映した胡麻章と五線譜である。④「加賀掾」には胡麻章がない。

29 「はんとさばかりかたりしは」



① 「小松屋」



② 「十寸見」



④ 「加賀掾」



⑤ 「土佐少掾」



③ 「世界」

「語る」は第一類動詞である。①「小松屋」は「かたりしは」〈DSSS〉で、一拍目が下がっていて、江戸アクセントとみられる。②「十寸見」は〈UUUU〉、⑤「土佐少掾」〈UUUDU〉で近世京都アクセントを反映とみてよい。③「世界」は〈3.7777〉で第二類動詞の近世京都アクセントHLLLLかのである。

なお、①「小松屋」、②「十寸見」には胡麻章がないが、④「加賀掾」、⑤「土佐少掾」に胡麻章のあるものに次の例がある。

「たけつて龍をにらみ付」



④ 「加賀掾」



⑤ 「土佐少掾」



③ 「世界」

「にらむ」は第二類動詞で、近世京都アクセントはHLLである。これを「にらみ〈U××〉」④「加賀掾」も「にらみ〈UDD〉」⑤「土佐少掾」もともに反映している。③「世界」は〈6 #4 3〉がHLLを反映しているとみられる。

#### 四 おわりに

ほぼ同じ歌詞の河東節、嘉太夫節、土佐節の胡麻章と明治期の河東節の採譜について、名詞と動詞に分けて分析した。二拍名詞には、二で述べたとおり、①「小松屋」、②「十寸見」とも近世京都アクセント、すなわち上方アクセントの反映がみられる。動詞については、三拍第二類動詞のHLLという近世京都アクセントと言えるものもあるが、江戸・東京アクセントもあり、江戸か上方かの判断がつかないものが多い。

一曲をとしてみると、①「小松屋」、②「十寸見」では、近世京都アクセントが集中して現れる箇所がある。それは、『源氏物語』『若菜上』の女三の宮を柏木が垣間見るエピソードを撰り込んだあ



たりである。歌詞の内容との関係であるのか、先行音曲の影響があるのかは今のところ分からない。特に反映が顕著なのが②「十寸見」である。京都で活躍した加賀掾の正本④「加賀掾」などは、この部分に胡麻章が多くはなく、江戸で活躍した土佐少掾の節付けに影響を受けたともみられない。

初世河東が唄っていた頃よりも、四世河東が『十寸見要集』をまとめたときの方が、上方アクセントが意識されたものとみられる。それが、明治期に採譜された頃には、上方アクセントから江戸・東京アクセントへ変更されてしまっている。『十寸見要集』は繰り返し出版されていて、胡麻章も変更されているわけではないのだが、江戸で継承されるうちに、上方アクセントから江戸アクセントに改められていったのであろう。

寛文から百年ほどの間は、それぞれの太夫が新たな節付けをして語り、唄われ、江戸が先か、上方が先かは胡麻章からは断定することとはできない。しかし、河東節の《小袖模様》では、特に上方と江戸とでアクセントの高低が逆になる二拍第三類名詞や、江戸とは異なる三拍第二類動詞が、聞かせどころでは上方アクセントで語られ唄われた。

今後はこの傾向が《小袖模様》の独自のものなのかどうかを、『十寸見要集』の他の曲を分析することにより明らかにしていきたい。

注(1) 坂本清恵「近世音曲に反映するアクセント」『中近世声調史の研究』

笠間書院 二〇〇〇年

(2) 坂本清恵編『長唄の伝承』檜書店 二〇一三年

(3) 坂本清恵「古浄瑠璃《こそでうり》から河東節《小袖模様》へ―詞章

の地域差（シツバリ）と《ジュウワリ》など―」『日本女子大学紀要文学部』七十四号 二〇二五年 この稿末に詞章の異同を掲載している。

なお、その後の小十郎譜の調査で『老松』の「まつのいろ」が、大正九年十一月版では「いろ（433）」であったが、大正十三年二月版以降「いろ（2×3）」に変更されたことがわかった。上方アクセントのH Lから東京アクセントのL Hへの変更例である。

(4) 以下の河東節関係の経歴は、竹内道敬『河東節三百年』河東十寸見會（東洋書院 二〇一七年）による。

(5) 平野健次ほか『日本音楽大事典』平凡社 一九八九年

## 参考文献

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤榮作・鈴木豊編『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版 一九九七年

この研究は、JPRS K034の助成を受けた。〓所蔵資料の閲覧掲載のご許可をくださった天理大学附属天理図書館、国立音楽大学図書館、都立中央図書館に御礼申し上げる。また、本稿は、二〇二四年三月一六日に行った日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画シンポジウム「江戸音曲の流れを考える―半太夫節から長唄へ―」での「河東節《小袖模様》とアクセント」をもとに研究を加えたものである。ご参加いただき、ご意見、ご感想をお寄せいただいた方々に御礼申し上げます。